在日非日系イスパノアメリカ人のブラックユーモア
―トランスナショナルな社会的相互作用への影響―

ピフォー ガルベス マルセロ アレハンドロ

Black Humor among Non-Nikkei Hispano-Americans in Japan:
Its Influence on Transnational Social Interactions

Marcelo Alejandro PIFFAUT GÁLVEZ

1. はじめに

現在、ますます多くの人々が国境を越えて移動している。国際移民は、「移住の理由や法的地位を問わず、通常の居住地以外の国に移動し、少なくとも12か月間当該国に居住する人々」（DESA 1998）と定義され、2019年には世界で約2億7200万人にものぼった。日本には現在、永住者・特別永住者を含めた様々な在留資格を持つ外国人が約285万人いるとされ（法務省 2021）、こうした多様な外国に由来する人口は、2060年には約1076万人になると予想されている（是川 2018）。このように、出身地や在留資格など背景の異なる移住者が増えるにつれ、移民・外国人と日本人との社会的な関わりに対する関心が高まると考えられる。

イスパノアメリカは、アメリカ大陸で最大のスペイン語文化圏を指し、これまでに日本には日系のイスパノアメリカ人が移民としてやってきていた。しかし、近年、日本との文化関係や民族的関係がない非日系イスパノアメリカ人の移民も増加傾向にある。在日非日系イスパノアメリカ人(1)のコミュニティは多様な背景を持つ人々の集団であるが、国際移住の過程でそれまでの日常生活が中断され、家族や親しい人々、見慣れた風景から引き離されるという共通した経験を持っている。それは、移住前にはあったソーシャルサポートを失うだけではない。Schütz & Luckmann（[1973] 2015）によれば、移住前に社会化を経験した世界、つまり、ものの見方や感じ方、価値観のベースを築くことになった世界から遠ざかることは、世界を理解するために必要な意味や意義を与えてきた生活世界の構造からも遠ざかることになるという。ものの見方や感じ方、価値観の違いは、移民にとって移住後のストレスになり、在日外国人間や受け入れ社会と移民者との間で軋轢や衝突を生む原因になる場合があることも指摘されている（Schütz & Luckmann 同上）。

これまでの研究（Lund 2011; Rothwell et al. 2011; Shifman & Katz 2005; Vucetic 2004; Zilberg 2017）では、異文化衝突の多い多民族社会・移民の社会においては、ユーモアはコミュニケーションのツールとしてしばしば用いられることが明らかになっている。社会的弱者である移民にとってユーモアは、敵対心や緊張感を緩和させたり、自尊心を高め、自国文化を維持するのに役立ち、疎外感を減らせたりするなど、心理的な対処方法のひとつであると考えられる。一方で、ブラックユーモアとは、風刺的な描写や、ネガティブ・グロテスク・不気味な内容を含んだジョークまたはユーモアのことであり、倫理的に避けられる生死・差別・偏見・政治などのタブーを対象とするため、攻撃的ユーモア刺激

として分類される（上野 1992）。しかし、移民にとってのブラックユーモアが果たす役割についてはまだわかっていない。本研究では、在日非日系イスパノアメリカ人の社会的相互作用に、ブラックユーモアがどのような影響を与えているのかを考察する。具体的には、日本在住の非日系イスパノアメリカ人の語りの分析から、ブラックユーモアが移住後の生活にどのように、またどの程度影響しているかを考察する。さらに、ブラックユーモアが新たなコミュニティ形成にどのような影響を及ぼしているかについても検討する。

2. 研究方法

本研究では、京阪神大都市圏（大阪市、京都市、神戸市）および東京圏（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）[(2)]で開催されたインフォーマルな会合での聞き取りと中度の参与観察、特別情報提供者に対する質的インタビュー、それらを基に作成し実施したアンケート調査を通して、在日非日系イスパノアメリカ人のトランスナショナルな社会的相互作用におけるブラックユーモアの役割とその影響を検討することを目的とした[(3)]。具体的には、関西地方で2019年5月から11月まで参与観察を行い、2020年7月および12月に最初の質的インタビュー、アンケート調査、およびその予備分析を行った。また、関東地方では、2021年4月から10月まで最初の質的インタビュー、アンケート調査、およびその予備分析を行った。そして2022年2月から6月まで、両地方で最終的な質的インタビュー、アンケート調査、および最終分析を行った。調査対象者の内訳は、最初の情報提供者（2018年から2019年まで）は関西地方の居住者（91名）であり、次の情報提供者（2019年から2021年まで）は関東地方の居住者（90名）である。特別情報提供者は合計30名、そのうち関西地方の居住者が18名、関東地方の居住者が12名、年齢は30代前後（26～35歳）である。情報提供者は全員、在日3年以上の、就労が可能な在留資格を持つ非日系イスパノアメリカ人である。対象者の在留資格・職業細分化は、大学学位を必要とする「技術・人文知識・国際業務」が96.7%、専門学校卒を必要とする「技能」が3.3%であった。最終学歴については、大多数（89.5%）が大学卒業であったが、専門学校卒業の者もいた（10.5%）。性別については、男性103名（57%）、女性78名（43%）である。なお、図表のデータおよびパーセンテージは情報提供者全員（181名）を対象としており、引用は特別情報提供者（30名）へのインタビューから抽出した情報である。

インタビューや観察で得られた結果は文章化し、特徴的な単語をコード化したデータを作成したうえで、コードを分類し分析した。インタビューおよびアンケート調査はスペイン語で実施し、本稿で引用した内容はスペイン語母語話者である筆者が翻訳したものである。調査実施にあたっては、日本社会学会倫理綱領[(4)]に従い、対象者全員に説明を行い、その内容を十分に理解し、同意することを確認した上で、自らの自由意志で調査に参加してもらった。また、匿名性への配慮により、引用された対象者の名前は筆者がコード化した。

3. 結果

一連の調査の分析から、日本への移住の経験や「在日」という新たな環境におかれた在日非日系イスパノアメリカ人にとって、日系人や他の非日系イスパノアメリカ人との関係性において、ブラックユーモアが社会的に相互作用していることが明らかになった。このことから、彼らは、新たな環境下での生活において、ブラックユーモアを通じて自らの文化的背景を再認識し、次第に他者と共通の要素を発見し、その要素をもとにコミュニティのセンスの基礎を構築しようとしていることが示唆された。

3.1. 日系人との距離感

日本国内の日系コミュニティは1980年代から形成され、日系人口が集中している地域では祭りなどの文化的行事も行われている。これらの行事は、日系人文化を継承するフォーマルな目的を持つものであるとともに、新たな日系人同士とのインフォーマルな交流の場にもなっている。以下に紹介する情報提供者の語りから、非日系イスパノアメリカ人の日本における最初の社会的相互作用は、このような文化的行事に支えられていることが明らかである。こうしたイベントが、非日系イスパノアメリカ人同士の出会いの機会となっているのである。その一方で、非日系イスパノアメリカ人は、居住地域でイベントがあってもほとんど参加しないようである。なぜなら、非日系イスパノアメリカ人は、日系人とそのコミュニティに対して違和感を持っているため距離を置いており、最終的には関係を維持しようとしないからである。このことから、非日系イスパノアメリカ人は、日系人による文化的行事への参加・不参加を通して、日系人と自分たちを区別することになっていることがうかがえる。

> 名古屋などの行事に行くことも多い。日系人のイベントだけど、そこに（非日系）メキシコ人なんかもいて、そこで日本で最初の友だちをみつけることはよくある。同じ都市に住んでいることもあるけれど、それまでは出会う機会がなく、そういう文化的行事が出会いのきっかけになった。（中略）でも問題は、日系人は会うたびに自分が日本人であるかのように、日本について説教し始めること！私たちみんな南米で生まれ育ったのに……　うるさいよね。（中略）日本では、ラテン系や日系人の交流イベントがよくあるけど、それってだいたい日本人向けのものね。その一方で、日系人は他のイスパノアメリカ人の前で中南米のことを悪く言ったり、日本がいかに優れているかを説明したりしている……　日系人は（自分たちの）文化的背景[5]を誇りに思っていないみたいね。
>
> （N02、女性、28歳、ウルグアイ人）

非日系イスパノアメリカ人は、自国文化と日本文化の両方の要素からなる独自の文化を持つ。それゆえに、イスパノアメリカ地域の国からの文化や言語の背景よりも日本らしさを好む日系人を非難しているようである。さらに、日系人は非日系イスパノアメリカ人と接する際、日本とその文化について日本人よりも物知り顔で説明しようとしがちであるという。これは、あくまでも非日系イスパノアメリカ人の主観的な判断ではあるが、交流しようとしてもこのような態度を彼らが感じるのであれば、摩擦が生じるのも理解できる。

アンケート調査においても、日系人との距離感や、非日系同士との親和性を個人が感じていることが明らかになった。情報提供者全員に、日系人と距離を置くようになった個人的理由、および非日系イスパノアメリカ人との交流を好む個人的理由を複数回答で問うと、[6]「偉そう」な態度を取ること、謙虚で親しみやすい人ではないこと、イスパノアメリカ人であることを誇りに思っていないこと、という点が、日系人を避ける主な理由になっていたのである。対照的に、多くの人が、非日系イスパノアメリカ人は謙虚で親しみやすく、日系人とは正反対であると考えていた。さらに、非日系イスパノアメリカ人との相互作用を好む個人的理由には、「親しみやすさ」と「ユーモア」が明らかな最重要因子として挙げられた。こうした同じ非日系イスパノアメリカ人に対する肯定的な考え方も、社会的相互作用の面で日系人との距離感を生み出し、それを増幅させる要因のひとつであると考えられる。また、非日系イスパノアメリカ人は日系人とは異なるグループであると思うか否か、二者択一の質問をしたところ、大多数（88%）がそう思うと回答した。さらに、日系人と付き合うことに対して 3 つの選択肢を示したところ、「楽しみにする」（6%）、「無関心」（7%）、「楽しみにしない」（87%）という結果が得られた。最後に、交流する相手として日系人と非日系イスパノアメリカ人のどちらかを選ばせると、対象者の 91%が非日系イスパノアメリカ人を選んだ。これらの結果は、非日系イスパノアメリカ人が日系人から遠ざかる傾向にあることと同時に、非日系同士の同一化を志向していることを明らかに示している。また、本節の結果に男女間の差はないが、国籍によって僅かな差異が見られた。交流相手として日系人を選んだ対象者（9%）はすべて、日系人と付き合うことを「楽しみにする」と回答し、いずれもペルーもしくはボリビアの国籍を持つ者であった。少数ながらも日系人とも親しく交流しながら暮らしている人々の存在は、この集団の多様性を示すものといえる。

表 1 日系人への距離感から非日系同士の優先へ

第一　日系人との距離感を感じる個人的理由				
理由	1位		2位	
	人数	%	人数	%
偉そうな態度を取ること	91	50.3%	36	19.9%
教訓を垂れるような態度	33	18.2%	31	17.1%
日本人の振りをすること	21	11.6%	38	21.0%
文化背景への愛着が足りない	14	7.7%	39	21.5%
ユーモアのセンスの不足	11	6.1%	31	17.1%
移住経験を話しづらい	9	5.0%	4	2.2%
その他	1	0.6%	1	0.6%
距離感などを感じない	1	0.6%	1	0.6%

文化背景とは特にイスパノアメリカ地域の国からの文化や言語である。

第二　非日系との相互作用を好む個人的理由				
理由	1位		2位	
	人数	%	人数	%
親しみやすい	66	36.5%	48	26.5%
ユーモアが溢れる関係	53	29.3%	55	30.4%
母国への愛着を見せる	24	13.3%	26	14.4%
母国問題を会話しやすい	23	12.7%	27	14.9%
謙虚な態度	7	3.9%	15	8.3%
移住経験を会話しやすい	7	3.9%	9	5.0%
その他	0	0.0%	0	0.0%
好まない	1	0.6%	1	0.6%

3.2. 非日系イスパノアメリカ人との摩擦

在日非日系イスパノアメリカ人は多様な背景を持つ人々の集団であるため、非日系イスパノアメリカ人同士の間の相互作用には厄介事がみられる。関西地方を対象とした地域研究（Piffaut Gálvez 2020）では、在日外国人の間では旧文脈から生じる軋轢が依然として残ることが明らかにされている。これらの厄介事は「社交」に現れ、ある程度、社会関係に支障をきたすようである。問題は、諸国の長い歴史的関係や自国の文化から旧文脈で生じる軋轢を、日本に移住した後もある程度に引きずる点にある。ただし、移民経験や在日という新たな状況を通して、このような軋轢は少しずつ和らいでいく。ここで重要なことは、非日系イスパノアメリカ人自身がこの好転に気付いており、その過程において、ブラックユーモアが、コミュニケーションのツールとして頻繁に用いられることである。

国家を統一し、独立した共同体を一般的に自己の所属する民族のもと形成する「ナショナリズム」(Smith 2013)という政治思想や運動と、自分の国家に対し、愛着や忠誠を抱く「愛国心・パトリオティズム」(MacIntyre 1995)いう心情の両方がある。イスパノアメリカ地域の場合、対象者の発言は、ナショナリズムの傾向にあるといえる。この傾向は、歴史的な出来事と地域の教育制度との関連性から生まれると考えられる（Piffaut Gálvez 2020: 19）。これらの出来事は、独立戦争後、新たな共和国の構築過程の最中に起こった。これは、歴史上、共和国の「新しい伝統が創られ」(Hobsbawm & Ranger 1983)、政治的な単位と民族的な単位とが一致しなければならないと主張するナショナリズム(Gellner 1983)を通して国家の基礎を固める最も重要な期間のひとつだった。そして、国民的アイデンティティの構成要素も現れた。勝利者はこうした歴史を誇りの要素と捉えたが、敗北者にとっては恨みや不公平感を抱く要因となってきた。Gellner（1983）が指摘したように、近代社会の場合、教育制度は数世代にわたる歴史的ナラティブと、その観点・考え方を構築する中心的なシステムである。これは国家の結合を強めるという政治的目的で行われる。その上、イスパノアメリカ諸国の政府は、内部問題から注意をそらす目的で外敵を作り上げることを頻繁に行う。一世紀にわたるナラティブはすでに日常生活の一部であり、市民の相互作用にも現れる。

情報提供者の全員に直接質問すると（表 2）、大多数（92.9%）は歴史や政治などの背景が、現在そして日本でも、社会関係に支障をきたすものであると感じていた。これを各国の政府や教育制度の要因にする移民者は大多数（85%）を占める。また、多くの移民者（76.2%）がこれらの軋轢の緩和を望んでいるが、「どちらともいえない」と答えた対象者（23.8%）が少なくないことも軽視できない。個人は、国民の恨みを晴らさないような政策の責任を政治および教育制度に転嫁し、責任の矛先を他国に向ける。質的インタビューの分析から、「あの国が負けたから、勝者である我々に罪悪感を抱かせたい」などという言説が頻繁にみられる（81.2%）こともわかった。このような表現は、歴史的紛争だけではなく、政治、地域の最人気のスポーツ―サッカー―までの面に敗戦した国の人々が、成功した国をうらやむことを表しており、それゆえに自らを「愛国者」を自称する者も多い（76.2%）。また、本節の結果については男女間の差はなく、国籍間の差も見られなかった。

表2 社会文化的な背景に関する質問

日本でも、他のイスパノアメリカ人との社会関係に支障をきたす文化背景がある									
全く同意できない		同意できない		どちらともいえない		同意できる		非常に同意できる	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
1	0.6%	1	0.6%	11	6.1%	87	48.1%	81	44.8%
その社会関係への支障を各国の政府や教育制度のせいにする									
全く同意できない		同意できない		どちらともいえない		同意できる		非常に同意できる	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
1	0.6%	1	0.6%	25	13.8%	77	42.5%	77	42.5%
社会関係に支障をきたすものの緩和を望む									
全く同意できない		同意できない		どちらともいえない		同意できる		非常に同意できる	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
0	0.0%	0	0.0%	43	23.8%	69	38.1%	69	38.1%
「愛国者」を自称する									
全く同意できない		同意できない		どちらともいえない		同意できる		非常に同意できる	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
0	0.0%	14	7.7%	29	16.0%	77	42.5%	61	33.7%

3.3. ブラックユーモアの役割

非日系イスパノアメリカ人の社会的相互作用にはブラックユーモアがよく使われ、意外にも、その相互作用にポジティブな影響を及ぼしていることが明らかになった。冗談の対象とする好きな話題（表3）は、インタビューで得られた結果を文章化し、特徴的な単語をコード化したデータを作成したものであり、アンケート調査の質問項目に加えた。

表3　冗談の対象となる話題

話題	人数	%
母国の政治的な問題	67	37.0%
ラテンアメリカの文化	34	18.8%
イスパノアメリカに対しての偏見	27	14.9%
日本人のユーモアに対しての分析	21	11.6%
日本人との関係づくりにおける困難	17	9.4%
日系人との過去の経験	14	7.7%
その他	1	0.6%

アンケート調査の分析から、まず、自国や文化を批判するのは、非日系イスパノアメリカ人の友達を作る手段であることが明らかになった。複雑な話題を取り上げるときに、ブラックユーモアを用いて、雰囲気を和ませるようである。例えば、それぞれの国の悪いことを比較し、自国を馬鹿にするという流れになる。そして、いつの間にか、最も困る国がどこなのかという議論に発展する。このことにより、政治のタブーがなくなる。イスパノアメリカ地域では、「食事の席では、政治・宗教・サッカーの話はしてはならない」という表現があるが、それは、インフォーマルな文脈でも摩擦が生じるテーマを避けた方がよいという意味でよく使われている。同意するか否かの二者択一の設問では、全対象者の95.0%が、そのようなテーマを冗談の対象とすることを大きな変化として認識し、ほぼ全員（97.8%）が好転であると判断していた。このことは、以下の対象者の語りにも現れている。

> 日本に来てから、こうした会合で（イスパノアメリカの）諸国の状況や問題などについてたくさん知ることができ、勉強になった。僕たちはいつもそのこと

> について冗談を言う。政治問題を非難しながら、日本のような穏やかな国に憧れる……　残念ながら、今ではポピュリズムがイスパノアメリカ全体で拡大している。（中略）僕はアルゼンチンの悪い状況についてジョークを言う。左翼のせいで徐々にベネズエラみたいになりつつある様子について……　深刻な問題だけど、現実に甘んじている。そして、他国の問題について知ることで、対等なたちばであると感じたくて、一緒にそれをからかう。
>
> （N01、男性、28歳、アルゼンチン人）

つぎに、日本人や他の外国人がイスパノアメリカまたはラテンアメリカに対して持つ偏見が、ブラックユーモアに現れている。それは、「僕たち非日系イスパノアメリカ人」のイメージを強化していると同時に、「他者」との区別を明らかにしている。大多数（表4）は、日本人や他の外国人がイスパノアメリカ人に対する偏見を持っていると思うと答えた。その偏見は無知から生じることがよくあると考える人も多い。非日系イスパノアメリカ人は、その間違いを日本人と他の外国人が理解することを期待しておらず、本格的に非難する意図も、被害者意識もない。また、これら全ては極めてインフォーマルで遊び心のある環境にとどまっている。このことは、以下の語りにも現れている。

> ラテンアメリカと言うと、いつもブラジルの話になる。でもね、（アルゼンチンとは）しゃべる言葉もちがうのに（笑）。スペイン語圏の国といえば、タコスなどでメキシコがより知られていると思う。でも、それって変じゃないかな？日本にはペルーの日系人が多いのに、あまりペルーのことは知られていない……　無視されてしまっているみたい（笑）。ラテンアメリカといえばメキシコと思うグリンゴ（米国人）と同じようなものね。
>
> （P01、女性、26歳、アルゼンチン人）

> ラテンアメリカの文脈では、メスティゾ（白人とラテンアメリカの先住民の混血である人々）が多く、様々な混血の人もいることは知られている。アルゼンチン、チリ、パラグアイでは、白人の見た目をした人が一番多い。僕たちにとっては当たり前のことだけど、日本に来てから、僕は南米人なのに、なぜ白人に見えるのか、南米の人は茶色っぽいのではないかとよく聞かれる。（笑）僕は、他の白人のアルゼンチン人、チリ人、メキシコ人も、同じような質問を受けていることに気が付いた……　でも、面白いことに、僕たちは金髪ではないので、グリンゴ（米国人）の白人とは見なされないのかもしれないよ（笑）。
>
> （M02、男性、30歳、パラグアイ人）

表 4 偏見についての考え方

日本人は、イスパノアメリカ人に対して偏見があると思う									
全く同意できない		同意できない		どちらともいえない		同意できる		非常に同意できる	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
0	0.0%	7	3.9%	18	9.9%	137	75.7%	19	10.5%
他の在日外国人は、イスパノアメリカ人に対して偏見があると思う									
全く同意できない		同意できない		どちらともいえない		同意できる		非常に同意できる	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
2	1.1%	13	7.2%	47	26.0%	107	59.1%	12	6.6%
そのような偏見に対して、自分は被害者意識を持っている									
全く同意できない		同意できない		どちらともいえない		同意できる		非常に同意できる	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
149	82.3%	21	11.6%	9	5.0%	2	1.1%	0	0.0%

さらに、日本人のユーモアとの区別については、大半の対象者は「無関心」（65.2%）である、残りは「好き」（24.3%）、「嫌い」（10.5%）と主張していた（表5）。好きになったり興味を持ったりするのを妨げるものは何のかと聞くと、「言葉のもじりはいいけど、そんなに面白くない」、「子供っぽい」、「いいけど、飽きやすい」などの点が指摘された。これは、「僕たちイスパノアメリカ人のユーモア」という観念は、抽象的ではあるが分岐点となっているようである。イスパノアメリカ人は、故郷におけるアイデンティティの要素を、日本の文脈にまで持ち越して回復しようとし、そのため様々な起源の要素は、国籍を超えるブラックユーモアの一部となっている。その過程においても彼らは、自分たちのユーモア文化を継承しているといえる。

> 日本のユーモアはいいけど、時々退屈になって、私たちは自分のスタイルに戻ってしまう（笑）（中略）日本人は、私のブラックユーモアが好きじゃないと思う。ユーモアを言ってもスムーズに理解してくれる相手を見つけるのは難しい。時々、日本人を傷つけてしまっていると思う。ブラックユーモアを言うことが、相手を傷つけているとは思いもしなかった。友達としては、イスパノアメリカ人と交流するほうが、日本人と交流するより簡単。
>
> （N02、女性、28歳、ウルグアイ人）

表 5 日本人のユーモアに対しての対象者の態度

嫌い		無関心		好き	
人数	%	人数	%	人数	%
19	10.5%	118	65.2%	44	24.3%

最後に、日系人が日本人の振りをするにもかかわらず周囲から「ラテン系」とみなされてしまうことが、しばしば冗談の対象になることがわかった。これは日系人にとってタブーに当たるようであり、日系人との距離感とつながっている。非日系人と日系人とでは、移民としての経験およびアイデンティティ形成の経緯が異なるため、アイデンティティの中心にあるものがそもそも違うといえる。日系人を対象とした先行研究（梶田ら 2005; Maeda 2006; 関口 2003; Sueyoshi 2017など）によれば、日系人に対する差別は日系人としての正当性を否定し、彼らのアイデンティティ自体を否定することにもなりかねない。しかし非日系イスパノアメリカ人にとって、こうした日系人の状況に共感することは極め

て難しい。彼らがこのような経験をしたことがないことは、以下の語りからも明らかである。

> チリ人は歯に衣を着せない性格だから、日系人が日本文化について説教し始めるとき、冗談めかして「でもお前は日本人じゃないよ」と言わずにはいられない。日系人に対して日本人じゃないことを思い出させたり、出身国に対してネガティブな態度をとることを非難したりするのは、彼らを幻想から目覚めさせるようなものだ。でも、（そんなことを言ったら）嫌われるよね……（笑）。たとえ冗談でも、少しでも批判されるのが気に入らないんだ。だから偉そうな態度を取っているんじゃないのかな。（中略）結果的に、（わざわざ日系人と友達にならなくても）僕たちの多くは、他の（非日系）イスパノアメリカ人を探せばいいやって思うようになった。
>
> （N01、男性、29 歳、チリ人）

このように、ブラックユーモアという統一点は、集団内の相互作用だけではなく、外界とも関連しているといえる。集団内の社交には「他者」のイメージが現れ、それに意味を与えられ、我々のイメージの積極的な強化に反映している。「他者」との区別は、特定のコミュニティおよびアイデンティティ構築に不可欠な要素である。大多数（87.8%）が社会的相互作用の過程にはブラックユーモアが「きわめて重要」であると考え、残りは6.1%が「重要」で、6.1%が「適度重要」と答えている。ブラックユーモアは非日系イスパノアメリカ人に特有の相互作用については、「きっと」（81.8%）、「たぶん」（12.2%）、「わからない」（6.1%）と答えていた（表6）。彼らの日常生活にはブラックユーモアが重要であることは否定できない。また、本節の結果については男女間の差はなく、国籍間の差も見られなかった。

表 6 ブラックユーモアの重要性

非日系イスパノアメリカ人同士の関係性におけるブラックユーモアの重要性							
重要ではない		適度重要		重要		きわめて重要	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
0	0.0%	11	6.1%	11	6.1%	159	87.8%
非日系イスパノアメリカ人の相互作用におけるブラックユーモアの特異性							
そうではない		わからない		たぶん		きっと	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
0	0.0%	11	6.1%	22	12.2%	148	81.8%

在日イスパノアメリカ人の語りには、日本人のユーモア、日系人、日本人や他の外国人によるイスパノアメリカまたはラテンアメリカに対しての偏見などの表現が現れている。このことは、他の外国人や日本人などという固まりの多様性を無視したステレオタイプ化を生んでいるといえる。一方で、対象者の主観から、一般化した他者の存在を否定できない。一般化は、ステレオタイプ化を生む恐れがある。移民者は、地理的位置の変化を通じて、元文化的要素による影響からある程度解放されていると感じるかもしれないが、問題は、特に同じような文化的背景を持つ人々と交流するとき、自分の価値体系から解放されることを意味するわけではない。さらに、「僕たちイスパノアメリカ人のユーモア」など

の表現がよく見られることから、ブラックユーモアは非日系イスパノアメリカ人に特有の相互作用であるといえる。つまり、マイノリティに置かれた彼らがブラックユーモアは集団に固有の文化として、関係性の中で生じ、イスパノアメリカ人同士との人間関係を円滑にするある種の武器のような機能を持つようになったと考えられる。

4. 社会的適応への影響をめぐっての考察

在日非日系イスパノアメリカ人は、移住後の社会的相互作用の中で自分の文化的背景の価値を再考し、その結果、大多数の非日系イスパノアメリカ人が母国の文化を大切にしながらも、自身をユーモアの対象として積極的に発信するようになることがわかった。様々な国籍を持つ人々の社会的相互作用により、自国の文化的背景を超える枠組みが作られている。非日系イスパノアメリカ人は、単なる愛国心にとどまらず、国境を越えて同じ文化や言語を共有する広大な故郷に対する愛着あるいは忠誠心を抱いているようである。その故郷こそ、彼らがいうところの「イスパノアメリカ」であり、その愛着はブラックユーモアを通して表現されている。スペイン語の方言には多少の差異があるものの、地域をまたいだ共通の単語も存在し、生活上の風習も近く、価値観も近い。ブラックユーモアを通して、共通の歴史や地理的要因、日常の文化的特徴が現れ、親近感を生み出すといった、社会的相互作用が起きる。また、母国の文化、地位、生活様式などに対する懐かしさ・ノスタルジーは、失うものを補うこともあり得る。これは、ブラックユーモアが、失った社会的相互作用を補完するように機能し、日常の会話にブラックユーモアを織り込むことで、他者との衝突を回避し、敵対心や緊張感を緩和させ、グループ内のユーモアにより移民が自尊心を高め、自国文化を維持し、疎外感を減らすことに役立っている。

日本に在住のイスパノアメリカ人にとっては、日本人とのユーモアの感覚の違いや、言語の違いの問題から、ユーモアを理解してくれる日本人の相手を見つけにくいようである。このことは、ユーモアを理解する／しないという二分法を超えて、日本人との深い相互作用の構築の困難さを表している。イスパノアメリカ人にとって、ユーモアは社会への順応を促進すると考えられる。ユーモアは、集団内の関係を平等化する機能に加え、一方で、集団外を排除する機能もあると考えられ、特に、非日系イスパノアメリカ人における日本社会への順応を促進するコミュニケーションツールとして重要な役割を果たしているといえる。その一方で、ユーモアは、集団に属さない人々を画一的に捉え、多様性を無視し、ステレオタイプ化を強化する恐れもある。在日非日系イスパノアメリカ人という集団において、日本人、日系人など「よそ者」が明確に区別され、その対象化の過程において自分たちの日本社会への順応が促進されることが明らかになった。

5. おわりに

本稿では、移民者の間の社会的相互作用に使われるブラックユーモアに関する実証的調査のデータを踏まえながら、文化の面で、非日系イスパノアメリカ人同士の間の構造的状況の背景を分析し、その構造的状況と、社会的相互作用とブラックユーモアとの繋がりの

必須性について考察した。文化的要因による固定的な説明に囚われず、特定の状況でコミュニティ形成の起点となった文化的背景の解釈や、その後のブラックユーモアを活かした行為に着目した。在日非日系イスパノアメリカ人という特定の移民の経験を、出身文化圏の背景だけでなく、日本における社会的相互作用の機会にも関連づけながら、移住という行為自体からの影響を抽出する枠組みを構築することで、行為者とみなされる移民の経験を考察した。このことにより、以下のような特徴が明らかになった。

まず、在日非日系イスパノアメリカ人の間では、旧文脈から生じる軋轢が依然として残る場合もある。諸国の長い歴史的関係や自国の文化から、旧文脈は現在の社会的相互作用に影響を与えることが明らかになった。また、同じ非日系イスパノアメリカ人であっても、異なる国籍の人々が交流し、お互いの背景や経験を比較し、ブラックユーモアを交えながら理解しあうことで、相違点だけでなく共通の要素を見つけていることから、こうした社会的相互作用が現代の移民のコミュニティ再考の過程に必要不可欠であることも明らかになった。さらに、移民という特定の状況と個別の意思決定や、ブラックユーモアを活かす行為を直接結びつける場合、それは移民自身が意図的、象徴的、自発的に結びつけている。そしてその結びつきは、イスパノアメリカ地域の文化や言語、その地域についての知識など、共通する文化的背景という要素から生まれるものである。

これらの特徴は、在日非日系イスパノアメリカ人の存在を可視化すると同時に、日本への移住後にブラックユーモアを通して、その文化的背景が再解釈され、彼らのコミュニティの基礎へと転換されることを示している。その上で、非日系イスパノアメリ人には、日本人や日系人のようになりたいという欲求はあまりなく、むしろ遠く離れた異国の地で独自のコミュニティを探し求めることを優先していることが明らかになった。

最終的に、方法論的には、一緒に笑うことは、研究者と対象者との間に信頼関係を築くよう努力することなく、ラポールが自然に表れるアプローチとして機能しており、インフォーマルな会合での聞き取りと中度の参与観察に必須なものであると思うようになった。本研究で示された非日系イスパノアメリカ人の先入観は、今後のイスパノアメリカ人の研究にも示唆を与えるものである。さらに、今後は在日非日系イスパノアメリカ人から述べられる先入観や、集団外を排除するユーモアの機能に焦点をあて、その特徴に対する社会学的考察を深めていきたい。

〈注〉

(1) イスパノアメリカの 18 カ国は、コスタリカ、キューバ、ドミニカ共和国、エルサルバドル、グアテマラ、ホンジュラス、メキシコ、ニカラグア、パナマ、アルゼンチン、ボリビア、チリ、コロンビア、エクアドル、パラグアイ、ペルー、ウルグアイ、ベネズエラであり、イスパノアメリカ人とは、その国籍を持つ人々を指す。イスパノアメリカという概念は、Urbanski (1978)などの歴史学および人類学の著書で使用され、イスパノアメリカ人の自己認識との関連性を明確にしている。そのため、本稿においても、この概念をもとに議論を行う。また、本稿では「在日」は、第一世代の外国人が日本国内に滞在または居住することを意味し、永住者・特別永住者は含んでいない。

(2) 東京圏は、国土交通省が作成している『首都圏整備に関する年次報告』（首都圏白書）の定義である。

(3) 中度の参与観察はSpradley(2016)、特別情報提供者への質的インタビューはTaylor et al.(2015)、アンケート調査はMellenbergh(2008)の手法を参照した。
(4) 策定の趣旨と目的は、https://jss-sociology.org/about/ethicalcodes/にある。
(5)対象者の中には母国、故国などのカテゴリーを利用する人も多いが、実際に、文化的背景を強調しようとしていることが明らかである。特にイスパノアメリカ地域の国からの文化や言語である。そしてその背景への興味を含むこともある。
(6)理由のカテゴリーは、インタビューで得られた結果を文章化し、特徴的な単語をコード化したデータを作成したものである。

〈文献〉

DESA, 1998, *United Nations, Recommendations on Statistics of International Migration, Revision 1*.

Gellner, E., 1983, *Nations and Nationalism*, Cornell University Press.

Hobsbawm, E. and T. Ranger, 1983, *The Invention of Tradition*, Cambridge University Press.

法務省統計局，2021，「2021年06月末在留外国人統計」（2022年3月30日閲覧）.

梶田孝道・丹野清人・樋口直人，2005，『顔の見えない定住化：日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会.

是川夕，2018，「日本における国際人口移動転換とその中長期的展望―日本特殊論を超えて」『移民政策研究』移民政策学会 10: 13-28.

Lund, D. W., 2011, "Immigrant Adjustment: The Importance of Humor," *International Journal of Diversity in Organisations, Communities & Nations*, 11(3).

Maclntyre, A., 1995, "Is Patriotism a Virtue?," R. Beiner. ed., *Theorizing Citizenship*, State University of New York Press.

Maeda, H., 2006, *The Social Integration of Nikkei Brazilian Immigrants: A Japanese Case Study*, University of Minnesota.

Mellenbergh, G., 2008, "Tests and Questionnaires: Construction and Administration," H.J. Adèr and G. J. Mellenbergh eds., *Advising on Research Methods: A consultant's companion*, The Netherlands: Johannes van Kessel Publishing, 211-36.

大島希巳江，2004，『日本の笑いと世界のユーモア―異文化コミュニケーションの観点から』世界思想社.

Piffaut Gálvez, M., 2020, 「移民者同士のアイデンティティ構築過程における「社交」：関西地方に居住するイスパノアメリカ人の事例に着目して」京都大学大学院教育学研究科令和2年度修士論文.

Rothwell, E., K. Siharath, S. Bell, K. Nguyen, and C. Baker, 2011, "Joking culture: The role of repeated humorous interactions on group processes during challenge course experiences," *Journal of Experiential Education*, 33(4): 338-53.

Schütz, A., and T. Luckmann, 1973, *Strukturen der Lebenswelt*, Northwestern University Press.（那須壽訳，2015，『生活世界の構造』筑摩書房.）

Shifman, L., and E. Katz, 2005, "Just call me Adonai: A case study of ethnic humor and immigrant assimilation," *American Sociological Review*, 70(5): 843-59.

関口知子，2003，『在日日系ブラジル人の子どもたち：異文化間に育つ子どものアイデンティティ形成』明石書店.

Smith, A.D., 2013, *Nationalism: Theory, ideology, history*, John Wiley & Sons.

Spradley, J., 2016, *Participant Observation*, Waveland Press.

Sueyoshi, A., 2017, "Intergenerational circular migration and differences in identity building of Nikkei Peruvians," *Contemporary Japan*. 29 (2): 230-45.

Taylor, S., R. Bogdan, and M. DeVault, 2015, *Introduction to Qualitative Research Methods: A Guidebook and Resource*, John Wiley & Sons.

Urbanski, E., 1978, *Hispanic America and Its Civilization: Spanish Americans and Anglo-Americans*, University of Oklahoma Press.

上野行良， 1992，「ユーモア現象に関する諸研究とユーモアの分類化について」『社会心理学研究』7(2), 112-20.

Vucetic, S., 2004, "Identity is a joking matter: Intergroup humor in Bosnia," *Spacesofidentity* 4(1).

Zilberg, N., 2017, "In-group humor of immigrants from the former Soviet Union to Israel," H. Herzog, eds., *Language & Communication in Israel*, Routledge, 129-50.